



(金) 第二土地区画整理事業
査は、区画整理（金沢西部

- 1 所在地 石川県金沢市畠田西三丁目
- 2 調査期間 一九九九年（平11）五月～一〇〇〇年一月
- 3 発掘機関 財石川県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 中森茂明・白田義彦・和田龍介・西田昌弘
- 5 遺跡の種類 集落跡（官衙関連遺跡カ）
- 6 遺跡の年代 古墳時代中頃～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本遺跡は日本海に臨む犀川・大野川河口部の扇状地上に立地して

おり、遺跡地内には犀川支流のひとつである大徳川が流れる。付近

には加賀郡津と推定されて

いる金石本町遺跡や、加賀

国府津と推定される戸水C

遺跡などが存在し、古代の

水上交通の要衝としてよく

知られる地域である。本調

査は、区画整理（金沢西部

う調査の初年度にある。

本調査では古墳時代中期～後期、奈良・平安時代の遺構を検出しているが、木簡を含む古代の遺物を埋蔵しているのは調査地中央を南北に蛇行して流れる旧河道SD〇〇八、調査地北端を流れる溝SD〇三一である。旧河道からは土器・木製品が多量に出土する中で、二〇〇点以上の墨書き土器と一点の木簡が出土した。墨書き土器は八世紀初頭～中頃に比定される須恵器杯に記されており、「語」「語」等の「語」字グループが大半を占めるなかで、「天平二年」「津司」「荒田家」などの注目される墨書きも散見される。旧河道はほぼ自然河道そのままに蛇行しているが、長い板材を伴う杭列や堰状遺構と思われる多量の部材が集中する箇所も確認され、何らかの治水・利水行為がなされていたと考えられる。ただ、これらの遺構は河道下層に存在する古墳時代中期～後期の遺構に伴う可能性も残る。またSD〇三一と名付けた古代溝は調査地端で検出されており、一部を検出するととどまっている。掘形は底丸の舟形を呈しており、幅も三mほどでそれほど規模も大きくなり、何らかの施設に伴うものと想定される。この溝からも墨書き土器三〇点弱、木簡一点が出土している。墨書き土器は「津」字を中心として「山田」「男山」などが確認されているが、旧河道で大半を占めた「語」字グループに属するものは確認されなかつた。墨書きされた須恵器杯の時期も八世紀中頃～後半に下ることから、旧河道とはその性格を異なるものであろう。

(1)

「
 □同刑姓「カマ」味知万呂十
 答忌寸□女冊束
 □田秋人冊
 合稻二百冊
 □内麻呂廿
 山辺足君冊
 妻館氣奈加女
 阿刀三繩冊束
 戸主阿刀足人六十
 天平勝宝四年上領
 」

(103)×292×9 081

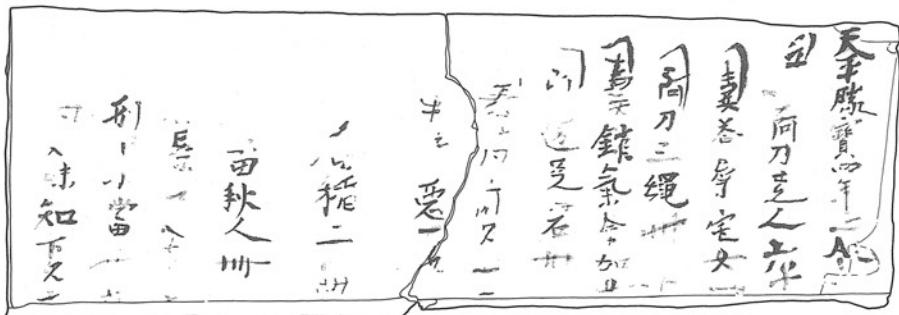
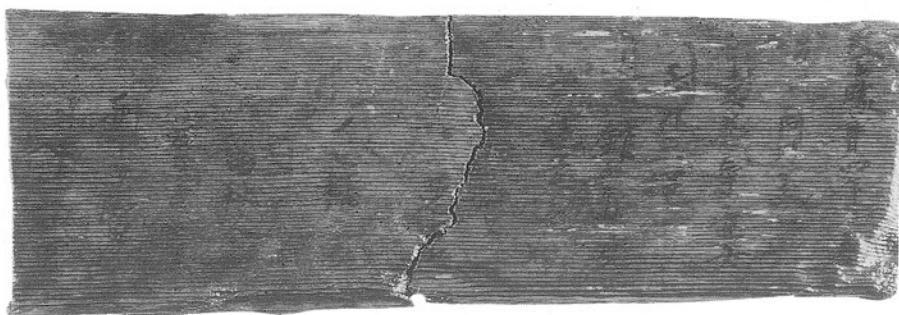
四京の印の玉

(2) • □□□

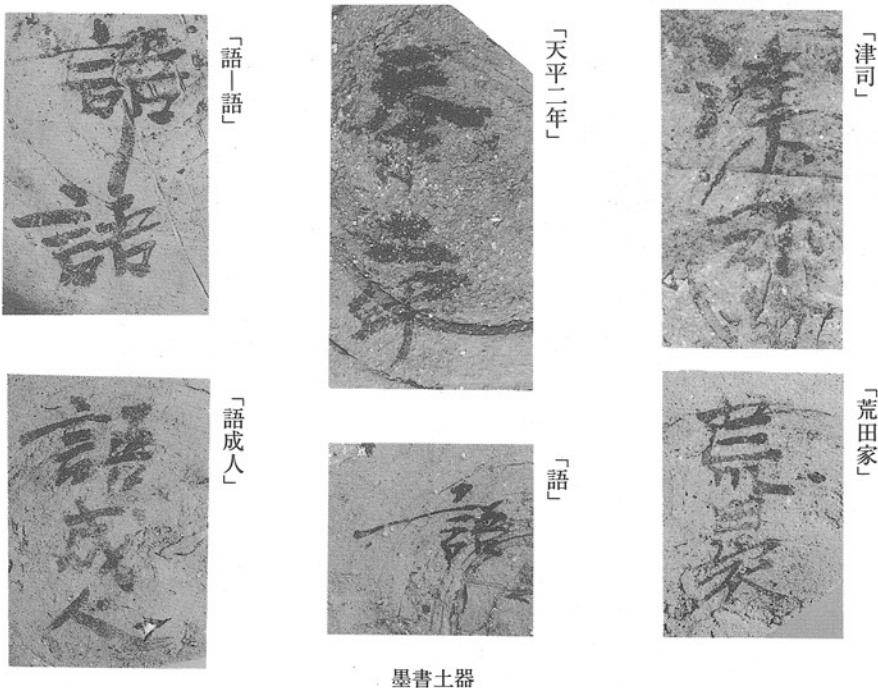
110×18×3 011

(1)は板材を横に用いており、二つに折れた状況で出土した。木田方向から見て上下端・右辺は両面キリ・オリ成形の痕跡を残すが、左辺は潰れたような状態で、墨付も一部欠損している。

全体に「個人名+稻束量」が列記されていることから、出拳関連の木簡と考えられ、「上領」の語から、出拳稻返納時に作成された記録簡とみなすことができる。合点は倉への収納の際に付された



(1)



墨書土器

ものか。記載様式は、籍帳の類から抜き書きしたような規則性のあるもので、総計記載の「合稻二百冊」を境として前半部と後半部に分けられる。前半部は「戸主」「妻」の統柄記載が見え、名前の上に鉤型の合点が付されている。後半部はほぼ「合稻二百冊」に書き出しの高さを合わせ、前半部と区別をはかるかのようである。

「戸主」「妻」などの統柄記載が見えることから、この木簡の歴名は阿刀足人の戸について記していると思われ、出挙が戸を単位として行なわれていた実態を示している。後半部の四人も同戸構成員と考えられるが、記載様式も異なり、合点もないことから、出挙稻未納者を列記したものと解したい。

本木簡は、籍帳から抜粋した形で一つの戸を一枚の木簡に記載する初めての資料であり、また天平勝宝四年（七五二）という、これまでの出挙関連資料にない時期の資料として重要である。

(2)は、上・左右端には両面キリ・オリ成形による切断の痕跡が、下端には斜め方向の片面キリ・オリ成形の痕跡が見える。これらの結果墨痕は判読不可能になつており、切断廃棄された木簡と見られる。なお、木簡の釈読にあたつては国立歴史民俗博物館の平川南氏にご指導いただいた。

9 関係文献

(財)石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』三・四
(二〇〇〇年)

(和田龍介)